

---

# ガラスの靴

knight bug

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガラスの靴

### 【Nコード】

N7238Z

### 【作者名】

knight bug

### 【あらすじ】

孤児だった少女が、日本人夫婦の元に引き取られアイススケートーとして、世界に羽ばたいて行こうとするお話です。  
シリアスなお話です。

## ガラスの靴

ガラスの靴を落としたシンデレラは、その後幸せになったけど、もしあの時ガラスの靴を落としてなかったらどうなっていたのかしら。  
..。

皺皺の手で自分のトロフィーを摩る老女の顔は、微笑んでいた。そして、彼女の隣に立つ老人も彼女と同じように微笑む。

「お互いに沢山悩み、傷ついたけど、あなたといっしょになれて本当に良かったですよ」

老女はそう言うと言を細め、手に持っていたトロフィーを箱の中に仕舞い込んだ。彼女の栄光を飾ったトロフィーは、この屋敷には飾られた事が一度も無い。

それは、彼女が自ら望んだ事だったからだ。

未だに疼く腰の傷、「これさえなければもっと上まで行けたのに」  
..

彼女の目から涙が零れ落ちる。

彼女の夫は、床に落ちた膝掛けを取ると、彼女の膝の上に置く。

「そろそろ冷えるから、暖炉の前にも行こうか」

優しく声をかけた。

「そうですね。今夜はとても冷えて来そうだね。あの時の傷が、疼いて来るもの」

老女がそう言うと、腰を摩っている。

2人は、寄り添う様に暖炉の火を見ていると、隣の部屋から大きな歓声が聞こえて来た。

「もう、始まっちゃったんですね」

「そうだな。早いな……。さあ、観に行こうか。私達の孫の演技でも……」

そう答えると2人はそろそろと立ち上がるとテレビが置いてあるとなりの部屋へと向った。

其処には、今度のヨーロッパ大会で優勝するために、頑張っている2人の孫と、彼らの友人の孫の演技が始まった。

ボレロの曲に合わせて、エッジを滑らせる少女を背の高い男性が愛おしそうに両手を広げる。

終盤までダブルアキセルやルッツも何も無く、リフトとステップそしてスピンのだけの2人の演技に目を丸くした老女。

「あら、珍しい……今回のプログラムには、ダブルアキセルもルッツも入ってないのね」

「あら、おばあさま」

其処に居るのは、今映像に出ている2人だった。

「だけど、全体的に丁寧で綺麗だわ。曲もよく考えて構成したのね。私が採点にしても、満点を出すわよ」

「ありがとうございます。いつもはパワー演技だけでイケイケゴーゴーだったんですけど、それだけじゃダメだって気が付いたんです

よ。そんな単調な演技は、いつか観客も飽きるから、自分達にしか表現出来ない物を作ろうって決めたんですよ」

孫娘のサクラの肩を抱きよせると頬に唇を押し付けた男は、そう言う目配せをした。

最後のスピンの終わった所で画像の中の2人は、目を合わせるとお辞儀をした。普通なら、その後すぐにリンクを去らなければならぬいが、画面の中の男性は彼女に対して跪くと手を差し伸べた。

相手の女性は、真っ赤になりながらもその手を受け取ると、会場から拍手喝采が上がっていた。

「あらあら。随分、派手なプロポーズね。でも、素敵よロナルド」

「ありがとうございます。美月おばあさん。サクラさんが僕のプロポーズを受けてくれたんです」

「あら。良かったわね。流石はリカルドの孫ね。桔梗もそう言えば、オクタビオの孫にプロポーズされたとか言ってたわね……。隼人はどうするのかしら……。ちゃんとプロポーズ出来たのかしらね？」

年頃の三人の孫達を持つと要らぬ世話を焼きたがる老女は、フフフと笑った。

そんな老女を包み込む様に、周りの者達も笑い出す。

「みんな、君と血縁を結びたがっていたからな……。流石に自分の娘がデューオの息子と結婚したいと言って来た時には、驚いたけど……」

老人が、茶目つ氣たつぷりに皮肉を言うと、周りはどっと笑い始めた。

「おじいちゃま！！ 全く幾らママと結婚したパパのお父さんがおばあちゃんの事で争っていたからって．．．！！！」

サクラが少し半泣きになりながら、自分の祖父に抗議して来る。

少しばかりやり過ぎたようだな．．．。

そう呟く老人に老女は、フフフあなたは、いつでも私のことになる  
と見境ないんですから．．．と嗜めている。

サクラは、婚約者の手を握りながら祖父母達の顔を見るとにつこりと微笑んだ。

孫のサクラが微笑んでまで聞きたい事など、碌な事など無かったが、  
2人はそのまま黙ってサクラの言う事に耳を傾ける事にした。

「2人は、どうやって知り合ったの？ ママ達に聞いても『さあね。オバアちゃん達に聞いてちょうだい』ってしか言わないのよ」

2人は、目を合わせるとにつこりと微笑んだ。

この家にある古いビデオカメラとテープを書斎の奥の引き出しから取り出して来た老人に、妻は呆れた様に手を口に当てて笑っている。

「お前達も、見たいだろう。おばあさんの演技を．．．」

「あなた．．．」

「もう、良いだろう。サクラもプロポーズを受ける年頃になったんだ。君の事情も分かってくれるよ」

「え？おばあちゃんも、スケートやってたの？」

サクラは、驚いた様に目を大きくさせた。

「ええ。ほんの少しね」

悪戯っ子の様な微笑みをしてくる祖母は、頬を紅潮させた。  
漸く回線を繋げた夫は、テレビ画面に映し出される若き日の自分の妻の姿に目を細めた。

《さあー今大会、最後の走者です。フランス代表 美月 甲斐選手》

会場で撮ったのだらうアナウンスがフランス語と英語でされている。くるみ割り人形の曲に合わせて、黒髪の少女がぎこちなく動き出す。まるで本当の人形みたいだ。妖精の魔法で、人形は自由に踊り出すと共にその喜びをストリートラインステップでリンクの端まで行く。と其処で、いきなりダブルアクセルを飛んだ。

クワトロジャンプ

今で言うような、四回転の特技は出なかったが、画面の中の少女は、まるでスケートの本のように規則正しいステップと体に無理が来ない姿勢でのジャンプをしていた。

その上、彼女の表現力に観客達も笑いや拍手を送っていた。

リンクの中央でビルマンスピンを決めると、少女は四方の観客達に膝を曲げてお辞儀をしていた。

「お、おばあちゃん?!! これって幾つの時の?」

「10か、11かしらね? あなた」

「そうだね。この後君は、すぐにスペインに引越しちゃったからね」

そう言って微笑んでいる2人を見て、サクラは驚いていた。  
誰も、おばあちゃんが昔フィギアスケートをやっていたなんて教えてくれなかったからだ。

そう言えば、一度だけサクラが初めて出場する大会に、彼女の祖母が会場入りした時は、周りの選手は愚か、記者達も2人の姿に驚き回りを取り囲んでいた。

あの時から、おばあちゃん達は、一般の人とは違う世界の人だったんだと気が付いたが、まさか本当にスケーターだったなんて．．．

「おばあちゃん．．．どうしてスケートを止めたの？」

老女は、少し笑顔を曇らせると窓の外に降り積もる雪を見つめていた。



## ガラスの靴（後書き）

無謀にも新しいお話を書き始めました。ストックがあるので多分年内？には終盤となってしまう可能性も高いですが、年を跨いでしまう可能性が高いと思います。

何じゃそりゃ・・・ですよね。

## 魔法の始まり

「こんかいは だいじょうぶ．．．こんかいは だいじょうぶ．．  
．こんかいは．．．」

隣の部屋で何度も声を出して自分を落ち着かせようとしている少女がいた。

ここは、アメリカカルフォルニアにあるカトリックの教会が運営している孤児院である。

今、ここに居るのは美月と言う名の3才の少女だった。

長い黒髪は、少女の性格を表すかのように真直ぐに伸びていた。

前髪は、形の良い眉の上で揃えて切られている。

少女は、立ち上がると年配のシスターに手を引かれて、面会室と言われる部屋へと連れて行かれた。

今日は、もしかしたら自分を引き取りたいと言ってくれる人がいるかもしれない．．．。

そんな淡い期待を胸に、少女は一冊の絵本を腕に抱き締めたまま。冷たい灰色の打ちっぱなしのコンクリートの廊下を不安げな顔で歩いてく。

そんな少女の気持ちを知ってか、年配のシスターは「大丈夫ですよ。神様の御心に従えば、きっと美月を引き取って下さる方も現れますよ」その言葉をかけると微笑んだ。

美月と呼ばれた少女は、コクリと頷くと、焦げ茶色の大きなアーチ型の観音扉に拳をやりと、大きく息を吸った。

コンコン

まるで彼女の不安を表すかのように、震えるようなノックの音が響く。

「お入りなさい」

神父様の優しい声に、年配のシスターは美月のために扉を開けてやると、神父室の中に神父様の他に若い夫婦が寄り添う様に座ってこちらを見ていた。

「し、しつれいします」

少女が、辿々しく言葉を選びながら言うと夫婦は、お互いを見合つて笑顔で何かを合図した。

この人達は、この所自分に会いによくこの孤児院に来てくれている。初めは、色々な遊びを夫婦から教えてもらった。縄跳びや隠れんぼ、それに一番好きなのは彼らと初めて孤児院の外で会った時に、見に連れて行ってもらった、スタードリムのアイススケートショーだった。

何度かテレビでは見た事があるが、実際に生で見るのとは大違いだ。

キラキラと輝く様に銀盤の上を滑り出す妖精達スケーターを見て、美月は歓声を上げた。

「すごい！！ わたしもあんなふうにすべりたい！！」

そんな言葉を聞いた夫婦はお互いを見つめると目配せをしていた。その日を境に、美月はその夫婦とよく面会をするようになっていた。今日でこの面会も、もう一ヶ月経った。

神父様は、美月を見ると手で招き寄せ、彼らを美月に紹介した。

「美月。こちらは、甲斐 弘樹さんと甲斐 真奈美さんです。美月とも何度もお会いしているから、もう知っているでしょう」

神父様に優しくそう言われ、美月はコクンと頷いた。  
神父様は、美月の小さな頭に大きな手を乗せると優しく撫でた。

「この人達が、美月の新しいパパとママになる人ですよ。神様が美月に最良のご両親を引き合わせる様にあなたの誕生日にプレゼントをしてくださったのでしよう。良かったですね美月」

優しく微笑む神父様の目尻には、少し涙が見えた。

美月は、自分の実の母親がどんな人かも知らない。ただ知っているのは自分がこの孤児院の前に捨てられていたと言う事だけだった。今から三年前のクリスマスの夜の事だった。  
クリスマスミサを終えた神父は、戸締まりをしに教会の扉を閉めに行くと、扉の前に竹箆が置いてあった。

その中には、毛布に包まれた乳飲み子がすやすやと眠っていた。  
哀しそうな表情をした神父は、その竹箆から乳飲み子を抱き抱えると、ハラリと一枚のメモが地面に落ちた。

其処には「事情があり、この子を育てる事が出来ません。この子の名は美月。美しい月が出た晩に生まれたのでそう付けました」そう書かれていたメモが入っていた。

神父は、この孤児院のかかりつけの医師に美月を診せると、医師は「この子は生後一ヶ月と言った所でしょう。私の方から出生届を制作して置きましょう」と告げると、美月の誕生日の欄に11/23日と書き込んだ。

確かにこの年の11/23には、24年に一度と言われる程の美しい満月が出て話題になっていた。

それ以来、美月はこの孤児院で暮らしている。

この日は、丁度美月が生まれて三年目の感謝祭の日だった。

神父は、美月がこの夫婦に引き取られて行くのを手を振りながら、美月を乗せた車が見えなくなるまでずっと手を振り続けた。

## 魔法の言葉

「美月ちゃん。今日から、私達があなたのパパとママよ。もうおじさんとかおばさんとか呼ばなくても良いのよ」

そう言った真奈美に美月は抱きつくと、大声で泣き出した。  
余程不安だったんだろう。

こんなに小さな子が、必死で自分を引き取ってもらおうとしているのを見て、放っておけなかった2人は、遂に美月を引き取る決心をした。

「美月ちゃん。女の子はね、幸せになるためには魔法の言葉が必要なのよ」

「まほう?」

「そう。幸せになる魔法よ」

「美月も、言えるまほうなの?」

「そうよ」

「しりたい!! マ、ママ・・・美月しりたい」

美月は黒く大きな瞳を輝かせるとママに縋って来た。そんな2人を見ていた弘樹は、「美月。パパって呼んでくれるかい?」そう言う  
と、美月はハニカミながらも、震える声で言った。

「パ、パパ・・・!」

「美月は、幸せになる魔法を自分から見つけたのね」

そう言つて2人は、美月を抱き締めた。

## かけられた魔法 1

その年のクリスマスに美月のパパとママは、美月にクリスマスプレゼントとして、スターチームのアイスショーのチケットを贈った。

美月は、目を輝かせると「ありがとう！パパ！ママ！わたしすごく見たかったの！！」そう言って2人に抱きついた。

その日の夜、美月もいつも以上におめかしをして会場であるスケートリンクへと向った。

美月は、パパ達の計らいで特別にスター選手の控え室に招かれた。其処には、色とりどりの華が所狭しと置かれている。

「やあ、こんにちわ。ターナ」

親しそくにパパが1人のスター選手に声をかけた。

振り向いたターナ フランチェスコットは、薄い水色の瞳を大きくするとパパとママの所に駆け寄って来た。

「やだ！！ ヒロじゃないの！それにマナまで！ あら！！この子は？」

ターナと呼ばれたこの人は、去年までロシア代表として世界大会に出ていたロシアの選手だった。

今は、引退してこのスターチームでプロとして、アイスショーをしている。

美月は、いきなり憧れのターナ フランチェスコットに会えたので、緊張しながらも辿々しいロシア語で自己紹介を始めた。

『は、初めまして。私は 美月 甲斐です。三才でしゅ』



緊張し過ぎて最後の語尾が舌足らずになり、幼児言葉になってしまったが、ターナはそんなことなどお構い無しに、美月を抱き締める  
と彼女の頬にキスをした。

「あなたが、ヒロとマナのラッキーガールだね。私は、ターナ  
フランチェスコットよ。よろしく美月」

美月はターナにキスされた頬を赤く染めて、にっこりと微笑んだ。

## かけられた魔法 2

クリスマスのショーと言う事もあって、クリスマスには定番のチャイコスキーのくるみ割り人形が会場内にかかる。着ぐるみを着たプロのスケーター達が舞う様に、銀盤の上を滑る。

彼らがジャンプやステップをする度に、パパとママは口々に「あら！ ルッツは苦手だつて言っていたのに、出来る様になったんじゃないの」とか「ま！ クワトロまで！！ 凄いわ！！」と美月以上に興奮している。

美月は、そんな両親の元で自然とフィギアスケートにのめり込んでいた。

小さなアメリカ人の選手が、次々とスピンを決めて行くのを見て、3才の美月は目をキラキラと輝かせてみていた。

「わあ！　すごい！　パパ！　みつきもやりたい！」

「スケートか？」

「うん！　やりたいの！」

「そうか、それなら今度、スケート教室を観に行ってみるか」

「わーい！！　パパ　大好き！！」

「まあパパったら、いつも美月に甘いんだから」

アメリカ生まれの日本人　甲斐　美月　ただ今16才。

その後、システムエンジニアの仕事をしている美月の父親の仕事の都合で、今まで何回も引っ越しをして来た。

今までに引越した国は、カルフォルニアに始まり、フランス、スペイン、そして今回初めての日本国内となった。

本当なら、来週からフランスに国際大会前の遠征練習に参加する筈だった。

頭からシーツを被った美月は、声を押し殺して1人、泣いていた。足を動かそうにも、ピクリとも動かない美月の両足。

その原因を作った人間が、また決まった時間に美月の病室に訪れた。

コンコン

「帰って下さい。もう二度と私の前に顔を見せないで」

中に入ろうとした人物に向って、美月は花瓶に生けられていた真っ赤な薔薇の花束を、ドアの方に向って投げつけた。

薔薇の刺がその人の顔や腕に当たり、薔薇の花弁が宙を舞って床に散らばって行った。

「．．．．また、来ます」

薔薇の花束を思いっきりドアの方に向かって投げつけた美月は、勢い余ってベッドから落ちた。

「きゃー!!」

ドサツと鈍い音がすると、美月は腰と肘を強く打った。起き上がるうにも、下半身が麻痺しているために動けない。

「大丈夫ですか!!」

帰ったと思っていた男が、自分の病室に入ってきて、自分の体に触ろうとして来た。

『触らないで』

咄嗟に口から出て来たのは、日本語ではなくフランス語だった。

「え？」

その時に美月の叫び声に駆けつけた看護士達が、男を病室の外へと押しやると、美月を車椅子に乗せた。

特別室の窓からは、病院の敷地内に設置されている公園で遊んでいる子供達の姿が見える。

私がスケートを習い始めた年と同じくらいかしら・・・

美月は、窓の外をずっと眺めていた。

## かけられた魔法 2（後書き）

過去から、いきなり16才の美月にと戻ったりしてますが、これからずっと過去の話を順に追って行く次第です。

これは、分かりにくいです！とか言うのがあれば、教えて下さい。

### かけられた魔法 3

「パパ！わたしもすけーとやりたいの！」

クリスマスのアイスショーを見た後から、毎日の様に、美月は自分もスケートをやりたいと言い出す様になった。

初めは、子供特有の気まぐれなのかとも思っていた、美月の両親も真剣に美月のスケート教室を探してくれた。

美月4才。

今日は、とてもご機嫌な美月は、鼻歌まで歌っている。

「どうしたの？何か良い事あったの？」

ママが美月に聞くと、美月は嬉しそうに、今日初めてスケートのコーチから褒められたのと言って来た。

美月のコーチは、スパニッシュ系のアメリカ人で、黒髪で茶色の瞳をしている。

結構、子供にでも厳しい事で有名だ。 そんなジュリアコーチから、

美月は初めて褒められたのだった。

なかなか出来なかったストリートラインステップ。

悔しくて何度も練習した。

そして漸く今日出来たのだ。

褒められたのが嬉しくて嬉しくて、美月は何度も何度も飽きるまで練習に明け暮れた。

そのうち、スピンや二回転のジャンプを飛べる様になって、パパも

ママもとても喜んでくれた。

初めて、ジュベナイル大会のメンバーに選ばれた時には、嬉しくつて何度もパパとママに縋って泣いていた。

大会まで、何度も曲を聴いて振り付けを憶えながら、毎朝5時の朝練にママが付き合ってくれた。

生まれて初めて出たジュベナイルの大会に出た。

ジュベナイルとは、年齢制限や級でノービスの試合に出れない子供達が、唯一出れる大きな大会である。

大会当日ー

リンク内に響くアナウンスの声。

《美月 甲斐》

名前を呼ばれ、リンクの中央に向って滑った美月。

ドキドキと高鳴る胸に手を添えて、大きく深呼吸をした美月は、周りを見渡した。

市内の大会と言う事もあって、人もまばらだが みんなが美月の演技を楽しみにしてるのが、幼い美月にも分かった。

くるみ割り人形の曲に合わせて、ストレートラインステップで、リンクの端まで行くと、二回転、二回転ジャンプを決めた。

ダブルダブルジャンプを三度決めると会場からは、わああ！！っと割れるような歓声が聞こえた。

最後にリンクの中央で、シットスピンを決めた時には、とても嬉しかった。

会場中の歓声を受けて、美月は、笑顔でお辞儀を何度もした。

肩をハアハアと上下に揺らしながらも、小さな美月は満面の笑みを見せた。

リンクの向こうでは、ジュリアコーチが両手を上げて、美月に大きな拍手をしてくれた。

この瞬間。私は、スケートがもつと大好きになった。

それは美月がスケートを始めて10ヶ月の事だった。

そしてスケートリンクに響き渡る拍手喝采に、私は驚きながらもお辞儀をした。

市の大会で優勝した美月は、カウンティ（郡）の大会に出る事になった。

トントン拍子に、美月は、北カルフォルニア州のジュベナイルの大会で優勝カップを貰った。本来ならば、後1つ大会があるのだが、この大会には美月は出なかった。

最後の大会も出たいと駄々をこねていた美月だったが、パパの仕事の都合で国外に移る事になった。

この年の夏に、私達はフランスに引っ越しをする事になった。

引っ越し当日、スケート教室の友達やジュリアコーチと抱き合うと泣いて別れを惜しんだ。

サクラメント国際空港から、私達家族を乗せた飛行機は、フランスへと飛んで行った。



## かけられた魔法 4 憧れの男の子

この年の冬、美月達一家は、フランスのリヨンに引っ越した。アメリカなら、今頃感謝祭の準備のためにスーパーはいつもごった返していた。

だけど、どうやらフランスには感謝祭が無いみたいだ。

美月の大好物の七面鳥の丸焼きが食べれないのかと思うと、アメリカに帰りたくなって来た。

母親は美月が、寂しい想いをしないようにと考えて、美月を近くのスケート教室に入れた。

そのスケート教室で、小学生にしてはスラッとした長身の男の子が、リンクの真ん中でドーナツスピンをしていた。

フワフワの金髪に碧眼と言う、まるで絵本の中から飛び出して来たような男の子。

その彼の名は、シャルル・シモン・ドラノエ。

すでに、取り巻きの女の子達がいるくらい、彼の人気は凄かった。

美月よりも二才年上の彼は、スケートもそしてバレエも上手だった。アメリカから引っ越して来たばかりの美月は、初めはみんなが何を話しているのかさえ分からなかった。

## かけられた魔法 5 憧れの男の子

フランス語は、全く話せなかった美月は、俯いてしまった。

そんな美月の姿をコーチの控え室から見ていた1人のコーチが、美月に駆け寄って来ると笑顔で話しかけて来た。

『あなた、美月でしょ?』

フランス語訛りの英語。だけど、今の美月に取っては母国の言葉を使う優しいコーチにホッとしていた。

『はい...』

『私の名前はアナイスよ。よろしく』

『美月です。よろしく、アナイスコーチ』

『美月は、どうしてカルフォルニア州のジュベナイル大会の決勝戦に出なかったの?』

『...それは、パパのお仕事でフランスに引越す事になって、出れなかったの。本当はすごく出たかったのに...』

今にも泣きそうな顔をしている美月を見て、周りの子達は遠巻きにそれをみていた。

『美月。じゃあ、今滑りたい?』

『良いの?』

途端にパァッと輝いた美月の顔は、本当にスケートを心から好きと言っているようだった。

「コーチ。アメリカ帰りの子にいきなり曲を着けて滑らせるなんて…、ねえ」

「ちょっと、特別扱いしても、実力が付いて行かないなら、カワイソーよね」

そんな陰口がコソコソと美空の背後で聞こえて来る。

まだフランス語は、分からないが何やら嫌みを言われているのは、美月にでも分かる。

美月は、ムツとしたが、自分はどうかやら歓迎されていないのは、よく分かった。

## かけられた魔法 6 憧れの男の子

『美空、曲は？』

『くるみ割り人形をお願いします』

スケート靴を履いた美月は、さっきまで泣きそうなくらいに萎んでいた心が、スケートが滑れると言うだけで、笑顔に変わって行った。リンクの中央まで滑ると、それまで滑っていた子達は、みんなリンクから上がる様にとアナイスコーチが指示していた。

曲がなり出すと、ストレートラインステップを軽やかに決めると、次にアメリカで練習していた二回転、三回転のトリプルジャンプをした。

前の大会では入れなかったドーナツスピンを咄嗟に入れ、フィニッシュを決めた。

さっきまで色々と美月の事を言っていた子達も、一度スケート靴を履いて銀盤を踊る様に滑れば、それまで美月の事を小馬鹿にしていた彼女達は、次第に美月の演技に引き込まれて行った。

久々に滑れて嬉しいのと、沢山練習をしていたトリプルジャンプが三度も決まって嬉しいのとで、美月はとても満足していた。滑り終わった美月に、集まる様に子供達の拍手喝采が高鳴る。

美月は、驚きながらも、膝を折る様に軽くお辞儀をした。

『美月！どうして、最後のスピンを変えたの？ あのスピンはやったことあるの？』

『いいえ。まだ、習ってないけど、さっきスピンをやっている子の演技をみていただけです』

『美月！最高よ！』

とこうして、美月のフランスでのスケート生活が始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7238z/>

---

ガラスの靴

2011年12月25日14時45分発行